

江戸の匠に続々挑戦者



「解けたぞ」大阪城大手門の柱のナゾが話題になっているが五日、毎日新聞社にこんな電話が二百件以上も相次いだ。大工さんあり、郷土史家あり、主婦ありで、挑戦者たちは多種多様。大阪城までわざわざ出向き研究する熱心な人たちが続出して同城天守閣事務所の係員も目を白黒。こうして出てきた解答例は幾何学を応用した頭腦的なものから「カッコよく見せるため、表面だけノコギリで切り、継いだように見せかけている。ほんまは一本の柱や」までこれまた様々。中には「正解に近そう」と思えるものもあるが、ともあれ以下は「謎(ナゾ)解きフィナーレ」の一端。

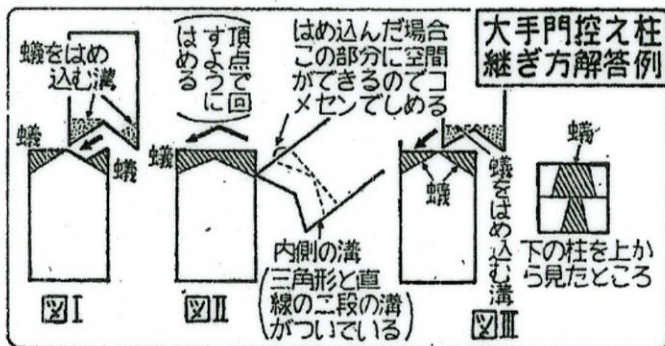
五日の毎日新聞編集局(大阪)は早朝から電話、また電話。「さそく城を見に行った。下から工夫して入れたらエエのと違うか」「あれは四方蟻(四方が蟻継ぎになっっているもの)と同じ原理や。惣持者も。一方、問題の大手門の柱の前で



柱の模型を作ってはめこみ方を説明する梁井さん

「ごうすりや継げる」解答 殺到

方(の蟻を斜めに切り込む方式。上。だが「それはあくまではめる」の柱もこの蟻の形にうまく合わせることが出来るというだけのこと。蟻の大きさが左右全く異なる。支柱を下の柱の山の斜面にそってずり降ろせばはめ込むことが出来る。現実にはそんな方法「はまらない」というのは守口市菊水通一の一六、建築業、梁井昭志さん(四七)。梁井さんは三年前、大手門の柱の不思議に気付き「本職がわからないようでは」と解明にかかった。何度も失敗したあげく、榎山さんはこの日朝、大手門の柱を調査、柱の割れ目からホソが台形になっていることを確認して模型を作ったといひ「これ以外の方法は現実にはあり得ない」と話。



に切り込む方法(図I)。上の柱の溝を下柱の蟻部にはめ込み、柱が半分入ったところで回転させる。上柱に谷形の溝を入れたのは回転しやすくするための法、はては「蟻の部分はあとで分だけ、上の柱と下の柱の間にすき間ができるのでコメセン(かんぬき)を入れて詰めたのだという。「この方法なら、上下左右の圧力にも強く、まずはずれることはない」と梁井さんは自信たっぷりに。第三の方法は大阪市淀川区十三東一の一四、郷土史家、榎山彦太郎さん(七〇)の考えた継ぎ方(図II)。基本的な考え方は図Iと似ているが、下の柱を上から見た場

(1736) 東海林さだお

